



## バルザックの「苦悩研究」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中堂, 恒朗 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00011197">https://doi.org/10.24729/00011197</a>

## バルザックの「苦悩研究」

中 堂 恒 朗

一八一九年といえは、バルザックが二十才の頃である。彼はレディギエール街（マレー地区）の屋根裏部屋に住んでいた。一日ざつと十八スーの生活はたいへん苦しいものだった。彼は作家になるために悲劇を書いていた。なかなかうまくゆかない。悪戦苦闘である。しかし彼には断乎たる意志と満々たる野心があった。ふと、眼下に見えるパリの町。「僕はパリを征服してやる」、そう彼は心の中で叫ぶ。洋々たる前途。が、彼には一体才能があるのかどうか……。

彼は妹ロールによく手紙を書いた。一八一九年十一月の手紙の中にこんな文句がある。「僕はペール・ラシエールへの苦悩の研究 (*Des études de douleurs*) に行つてくるので、ここで失敬する」「さあ僕はあそこで、たゞぶりと為になることを考えこんできたんだ。」<sup>1)</sup>

ペール・ラシエール。それはパリ東部の、丘の上にある、広大な共同墓地である。そこでは偉大な過去が凡庸な過去といっしょくたに、幸福な過去が不幸な過去といっしょくたに、ひっそりと永遠の眠りについている。そしてそこへ眠りにやつて来る魂は日々後を絶つことはない。そこは尨大な過去の堆積地、静寂な永久の共和国。しかしその小高い丘から、生きているパリの町を一望の下に見下ろすことができる。「四万の家々の並び」（「フェラギュス」より）、セーヌ川、ヴァンドーム広場の円柱、廃兵院の金色の円屋根、その向うにはフォーブール・サン＝ジェルマン（貴族街）が見える。パリの町は「ぶんぶん唸り声をたてている蜂の巣」（「ゴリオ爺さん」より）であ

る。それは「ひしめく蟻の町、夢あふれる町」(ボードレル)である。それはまた、ナポレオン没落後の反動期のパリであり、ブルジョワジーがその実質的支配のために躍進する時期のパリである。十五年に及ぶ戦争の後に訪れた、古いものと新しいものが異様に入り乱れる沸々たる首都の容貌である。

死と生との対比。深遠な鮮やかなコントラストである。二十才のバルザックはそこに立って何を考えていたのだろうか。我々はしかし、それについてとやかく推測するのを今は止めておこう。思いに耽る青年の姿をひとまずずっとしておこう。

一八三五年、バルザックは「ゴリオ爺さん」を出した。青年ウージェーヌ・ド・ラステイニャックは、南部シャラント県の田舎貴族の出身である。一七九八年に生れた。一八一八年秋法律勉強のためにパリに出てきた。ラテン区の近所にある下宿屋ヴォケール館に身を落ちつけた。貧乏貴族の長男は、月四十五フランの安下宿に住まなければならなかった。色白く、黒髪碧眼の好男子である。明敏な頭脳と南国人らしい果敢な気性にめぐまれていた。若さにあふれ、「ちよっとした衝撃にも爆発する」感動しやすい純真な青年だった。むろん彼は立身出世の意欲に燃えている。

ところで、パリは、彼が現実接触し観察したパリは、彼に何を教えただろうか。

ラステイニャックは、伯母の書いてくれた紹介状を持って、フォーブル・サンジェルマンのボーセアン伯爵夫人に会いに行った。夫人はブルゴーニュ家から来た錚々たる貴族である。彼女はダジュダ・ピント侯爵を熱愛していた。不倫の恋である。しかも侯爵の態度は冷たかった。夫人がラステイニャックに語る言葉には苦々しい調子がある。「……私も世間という本をずいふんと読んだつもりでしたが、まだまだ私の知らなかったページがたくさんありました。でもやっと今でははっきりと分りました。冷酷な打算をすればするほど、あなたは前へ前へと進

んで行くでしょう。情け容赦なく打ってやりなさい。そうすればあなたは人から畏敬されるでしょう。男でも女でも、中継の駅ごとに乗りつぶしては捨てて行く駅馬のように扱ってやるのです。云々<sup>3</sup>。典雅な憂愁な貴婦人の口からこのような辛辣な考えを聞こうとは！これは一種のマキャヴェリスムである。ここには斜陽の美しい抒情は少しもない。西日のようにかっと照りつける烈しいシニスムがあるばかりだ。反動時代といっても「王政復古」は「旧制度」への復帰ではないのである。ブルジョワジーの生活原理は容赦ない前進を続けており、到る所に浸透している。大貴族でさえもブルジョワ的に生きて行かなければならない時代である。誇高いポーセアン夫人はこの現実と妥協することなく、みずからは「偉大なる恋する女」としての運命を選んだ。しかし聰明な彼女にはこの選択の非なることがよく分っていたのである。彼女の言葉には、彼女自身の経験に由来する苦々しさのみならず、彼女の属する階級の自己批判と自己防衛とが混り合った異様な痛烈さもまた見出される。彼女の心臓と彼女の頭脳は分裂しているのである。ラストニヤックはやがてポーセアン夫人の「頭脳」の忠実な弟子となるであろう。しかし今は（というのは一八一九年だが）彼にはまだ夫人の言葉がよく解ってはいない。

ヴォケール館にはヴォートランという奇態な四十男がいる。何を職業にしているのかは不明である。頑丈な体格と鋭い眼光を持っている。適確な洞察力、機敏な活動力、雄弁な説得力の持主だ。それにアウトロー風の反逆的精神と徹底した合理主義的現実主義的哲学を兼備している。彼は妙にラストニヤックに関心を示した。こんなことを言っていて聞かせる。「一体どうやってパリでは、おのが道を切りひらいて出世して行けると思ふかね。（中略）人間のかたまっているこの密集のなかを、大砲の弾丸のように突破するか、またはペスト菌のように忍びこんで行くほかはないんだ。誠実なんて何の役に立つものか<sup>4</sup>。「わしは社会をよく知っている。わしが社会を非難していると思ふかね？とんでもない。社会はいつの世だってこんなものだったんだ。道学者が改良しようたって、決してできるもんじやない。人間というやつは不完全極まるものなんだ。（中略）わしは民衆の肩を持って金持を責めるつ

もりはない。人間なんて上流でも下流でも中流でも、みんな同じなんだからね。云々<sup>5</sup>。こんな調子でヴォートランの言葉は立板の水のごとく続く。権謀術数をもって富と権力を獲得しようというマキャヴェリスムこそ彼の言わんとするところである。

我々はここでポーセアン夫人の言葉を思い起すだろう。言葉の調子に違いこそあれ、貴婦人もアウトローも（ヴォートランは実は脱獄囚である）同じような考えを語っていることに気付くだろう。しかしヴォートランの言葉には苦渋はない。そこにあるのは毒気である。ポーセアン伯爵夫人の言葉が烈しい西日の光にたとえられるならば、ヴォートランことジャック・コランの言葉は真夏の孤独な太陽のさんさんたる光の過剰だと言えるだろう。

ラストイニャックはヴォートランの考えを、その「恐ろしさ」のゆえに拒否した。しかし、裏町に君臨するこの「悪の天才」の思想は、恋に苦しむ貴婦人の辛辣な教訓とともに、ラストイニャックの精神に消すことのできない痕跡を残すだろう。が、彼はこれら二人の経験した生き方とは異なった生き方をするだろう。両極端からの思想注入は、まさに両極端から行なわれたがゆえに、ラストイニャックには有益であった。彼がやがてマキャヴェリスムを帯して世間の荒波に乗り出すとき、彼は両極端のまんなかを歩んで行く秘訣を心得ているだろう。彼は逃避しないだろう。孤独ではないだろう。深刻な恋をしないだろう。堂々と表街道を歩むだろう。当代の真直中に居るだろう。彼は出世するだろう。富と権力を得るだろう。しかし一体、感受性の強い純情なこの青年が、冷徹な野心家に化してしまうのに直接の動機というようなものがあつたのだろうか。それはこうだ。

ヴォケール館にゴリオ爺さんが居た。昔はそうめん職人をやっていたが、革命中の飢饉の時に小麦粉を十倍の値段で売って大儲けし、相当の財を成した。妻の死後、二人の娘に夢を託している。彼女たちはともに上流家庭にといふ。長女のアナスタジーはレストー伯爵夫人となった。彼女にはマクシム・ド・トライユという情人があり、この色男のために彼女は金を浪費した。レストー伯爵はついに財産の管理に乗り出し、妻の放縦に防衛的処置

を取った。金に窮したアナスタジーは、父ゴリオの所へ無心に来るようになった。一方、次女のデルフィーヌは銀行家ニュシゲン男爵夫人となった。彼女は「金銭」を愛していたから、この成上り者のユダヤ人と結婚したのである。彼は金融の天才、巨万の金持、株式の策士である。しかし狡猾でけちな彼は妻には金を出ししぶった。デルフィーヌもまた姉同様父の所へせびりに来るのである。ところで、ゴリオは娘たちを熱愛し、彼女たちが彼の唯一の生き甲斐である。彼は唯々諾々と娘たちの無心に応じてやり、むこたちの無情な仕打を呪うのである。しかし彼の財は急速に減少し、老人はヴォケール館の最良の部屋からついに屋根裏部屋へ移り住むようになった。ある日、例によって無心に来た娘たちがゴリオの部屋で鉢合わせのかっこうとなり、もともと仲の悪い姉妹はここでたいへんないさかいをやった。老人はこれでショックとなってとうとう病床に就く。

ラスティニャックは社交界に出入りし、アナスタジーのことはよく知っていたし、またデルフィーヌとは特に親しくしていた。他方彼はヴォケール館の同宿者としてゴリオ爺さんと親しくなり、さびしい老人の打明け話を聞いてやったり、病床の「貧しきリヤ王」を介抱してやったりした。社会のきらびやかな表面とじめじめした裏面が、ラスティニャックにはまる見えである。傲然たる上流階級から呻吟する屋根裏部屋へと通じている謎のような道が、ラスティニャックにはたどって行けるのである。

ゴリオの臨終にも埋葬にも娘たちはとうとう現われなかった。ペール・ラシェーズの墓地深くゴリオの棺が埋められるのを見ていたのは、ヴォケール館の下男クリストフと、ラスティニャックだけだった。墓掘人夫が棺に土をかけようとするとき、ラスティニャックは酒手をねだられた。青年はポケットを探したが一文も見あたらず、クリストフに一フラン借らなければならなかった。「この事自体ほんの些細な事にすぎなかった」。けれども、ラスティニャックにとっては決定的な瞬間だった。発作的に彼の心は悲哀でいっぱいになった。「彼は墓穴を眺めて、そこに青春の最後の涙を埋めた」。やがて彼は腕組みしながら、ペール・ラシェーズの高台から、「蜜蜂の巣」パリ

の町に向つて傲然たる視線を投げる。そして言う「さあ、これから貴様と俺との勝負だ！」(A nous deux main-tenant)。この雄壮な言葉はラストイニャックが社会につきつけた挑戦状であった。この瞬間から我々は、純真で感動しやすいラストイニャックを見ることはもはやないであろう。彼は権謀術数の策士、冷徹なる野心家と化するであろう。

「ニュシングン銀行」(一八三八年)にはこう書かれている。「ラストイニャックという男は、パリに出て来た最初の頃から、社会全体を軽蔑するような指導を受けていた。すでに一八二〇年頃から(中略)正直な人間なんて見せかけだけだと考えていた。そしてこの世をあらんかぎりの腐敗といんちきとの寄り集りだと見なしていた。…彼は徳義というものを全然信用せず、ただ人が徳義を持ちうる環境もあるということだけを信じていた。こういう彼の考え方は、一瞬の間に決つたものであった」。

ラストイニャックのパリ征服への第一歩はニュシングン家へ夕食をよばれに行くことであつた。彼は男爵夫人(デルフィヌ)を恋人に持つだろう。男爵は見て見ぬ振りをしている。それどころか男爵の事業にいつのまにか片棒をかつがせて、四〇万フランという大金を青年に儲けさせてやる。一八二八年頃にはラストイニャックは「パリで最もエレガントな男性の一人」となっている。ニュシングン夫人にはだんだんと倦いてくるが、友人ビヤンシヨンの忠告を聞いて、辛抱するだけの分別が彼にはあつた(「禁治産」)。そして一八三〇年の七月革命だ。これより彼は政界に躍り出るだろう。彼の親分格たるド・マルセーが大臣になるに及んで、ラストイニャックは次官の地位を得る(一八三三年)。一八三六年には年収四万フランあり、一八三八年には大臣となり、ニュシングン夫人の娘と結婚する。一八四五年には貴族院議員ラストイニャック伯爵は法務大臣となつており、年収三〇万フランを得ている……。だが我々はもう、天にも登る勢いのラストイニャックのことはこれぐらいにしておこう。

一八四七年、バルザックは「従兄ポンス」を出した。あのペール・ラシェーズの「苦惱研究」から二十八年経っている。「ポンス」に描かれた世界は、ルイ・フィリップ時代の中産階級と下層階級の、打算とエゴイズムの生々しい現実である。そこでは「王政復古」時代の澁刺たる個人的人間の熱意は感じられない。ただただ金銭のために蛆虫のようにうごめく、あさはかな小人物たちのあくせくした姿があるばかりだ。世はまさにブルジョワの春、貪欲の季節。しかしその中にも美しい心の持主はいた。ポンスとシュムッケと、そしてトピナル。我々は彼等が貪欲な手合いによってどんなにひどい迫害を受けるかを読むだろう。そして我々は、バルザックの円熟した文体や技法のもたらす迫真力に驚嘆するだろう。そして「ポンス」のバルザックは、「ゴリオ」のバルザックとはかなり違っていることに気付くことだろう。「ポンス」の世界では、あの雄々しい挑戦の言葉も、きざっばいセリフにしかひびかないであろう。この世界からは、ペール・ラシェーズに立ってパリを見下ろすラスティニャックの姿は、芝居じみて鼻持ちならないように見えてくるのである。今や「平等」の名においておのれの利益のための主張がいたる所で聞かれるようになった。マキャヴェリスムは日常茶飯事になっている。この強食弱肉の欲求社会を眼前に見るバルザックの態度はペシミストであった。我々は「ポンス」に、晩年のバルザックの暗い、いらいらした調子を耳にするのである。

トピナルという青年がいる。彼はある劇場の雇人で、オーケストラの譜面台へ楽譜をくばるような役目をしている。ポルダン町という陽当りの悪い貧民街のアパートの七階に住んでいる。恋女房と子供三人の生活だ。彼の勤務する劇場では、ポンスがオーケストラの指揮をし、シュムッケは楽団の一人である。トピナルは実直な青年である。ポンスは彼がとても気に入り、毎月五フラン貨を一枚彼にめぐんでやった。ポンスが病床に就いていた間、青年はポンスの住むアパートの門前に毎日のように見舞いにやって来たが、遺産目当ての、ポンスの親類が来たと思われて、門番女シボにいつも追い返された。シボ自身がポンスの遺産を虎視眈々とねらっていたからである。



ついにポンスは死んだ。ポンスの親友であり、同居人であるシュムツケは悲しみのために泣くばかりである。しかしそんなことにはお構いなしに、公証人、弁護士、医者、門番女、画商、遠縁の親戚など遺産欲しさの貪欲が死体めがけて押し寄せてくる。葬式にしたところで、坊主、乞食、屍体運搬人、御者、墓掘人、葬儀係、墓碑周旋業者等々が手ぐすねひいて待っている。新しい死はペール・ラシェーズ「共和国」の街路を騒然たる「墓場通り」に変えてしまう。「宿屋の客引きにうるさくとりつかれる旅人のように、死人は死の河の岸辺で出迎えを受ける」<sup>10</sup>。こんな雰囲気ではあのラストニャックのように傲然と腕を組み雄壮なセリフを吐くわけにもいかない。ポンスの死を心から悲しんでいる二人の人間、シュムツケとトピナールは、ペール・ラシェーズへ向う馬車の中で互いにじっと手を触れ合っていた。まるで彼等は屠殺場へ送られる牛のようなかっこうである。ペール・ラシェーズの高台からパリの町を見下ろす余裕など彼等には少しもない。むしろ静かに死を悼むためには、あの「蜂の巣」の中の薄暗い一隅へ降りて行った方がよいだろう。

ポンスは遺産相続人にシュムツケを指定する正式な遺言書を書いていたが、世間知らずのシュムツケは遺産横領者だと罵られて、ポンスといっしょに住んだ部屋から追い出されてしまう。行くあてもないシュムツケを引きとったのはトピナールだった。シュムツケはまもなく、おどし文句を並べた召喚状がショックとなって死んでしまう。そこにはシュムツケがポンスから「包括遺贈を得んがために」種々不当な振舞いをしたというふうに書かれていたのだ。トピナールはこの悪辣な合法的手段に激怒するがどうにもならない。哀れなシュムツケを埋葬するためにペール・ラシェーズに行ったのはトピナールひとりだった。シュムツケはポンスの傍にこっそりと葬られた。そのときトピナールが墓地に立って何を考えたかは我々には分らない。バルザックはそれについて何も書いていないのである。

トピナールはやがて劇場経営主のはからいで会計係になるだろう。しかしこれは華々しい出世ではない。舞台裏

の四階で黙々と事務を取るこの男は「陰気で、人間嫌いで、めったに物を言わない」<sup>(1)</sup>。世間からは何か罪でも犯したのだろうと思われる。悲哀に閉ざされたこの誠実な青年を理解するものは誰もいない。

トピナールはバルザックの他の小説には登場しない。しかし我々はトピナールが今後どうなるかを知るには及ばないだろう。なぜなら、この喧噪の世界、このエゴイズムの波浪は、美しい貝殻の沈黙を海の底深く沈めてしまふであらうから。

「ゴリオ爺さん」の結末、それは同時にラスティニャックの新しい人生の出発であった。そこには希望と意志と闘志があった。しかしその雄々しい門出にあたって、青年は美しい魂を犠牲に供したのである。

「従兄ポンス」の結末、それは周囲の世界が相も変らずがやがやしている中で、あたかもそれを遮断するかのよう一人の個人の魂にひっそりと暮が下りるといふ呈のものであった。そしてトピナール青年の頑くきな沈鬱さの中には人知れず美しい魂が輝やいている。

二十才のバルザックがペール・ラシェーズで思いに耽っていたとき、彼はラスティニャックが抱いたような雄々しい気概を持ったかもしれない。彼もまた征服の意気に燃えていたのだから。しかしこの非凡な小説家は、晩年になって、もっと違った角度からペール・ラシェーズを描くことができた。一方のペール・ラシェーズから他方のペール・ラシェーズに至る長い時間の間には、バルザックの精神の歴史が、がっしりとまた深く横たわっている。二十才の「苦惱研究」は晩年にまで及んでいたのである。

(終)

#### 参考文献

(1) オノレ・ド・バルザック「彼の家族への手紙」アルバン・ミシエル 一九五〇年版 二六頁―二七頁

- (2) ボードレール「悪の華」の中「七人の老人」より。ガルニエ版 一四四頁
- (3) コナール版 バルザック全集 第六卷 三〇三頁
- (4)(5) 右全 三三二頁
- (6)(7)(8) 右全 五一五頁―五一六頁
- (9) コナール版 バルザック全集 第十六卷 七四頁―七五頁
- (10) 「従兄ボンス」ガルニエ兄弟 一九七四年版 二八八頁
- (11) 右全 三三四頁

x

た。尚、右の拙稿は、ガルニエ版「十三人組」と「ゴリオ爺さん」の解説及び注（P・G・カステックス担当）を参考にしました。

尚又、この拙稿は、かつて学生のために書いたものを、改稿したものです。